令和4・5年度「『未来を生き抜く人財育成』学力保障スクラム事業」の取組　B小学校

現状と課題

・学習用具の忘れが多い。（家庭の協力が得にくい。）
・基礎学力及び主体的に学ぶ姿勢が身に付いていない。
（学べる家庭環境が整っていない。）
・外国籍であり、日本語の理解が十分でない。
・学習内容を理解するのに時間を要する。（語彙力が十分身に付いていないため、学習内容習得に支障がある。）
【国語】・理解しながら文章を読み取ることを苦手としている。
　・日常の学習の様子から見ても、「読む・書く活動」の経験が不足している。
【算数】・計算力の定着が不十分である。
　・文章問題で問題場面を的確に捉えることができない。
　・解き方を順序よく説明することを苦手としている。

現状と課題をもとにした仮説

〇単元に応じた学習形態（TT、少人数指導、習熟度別指導）や学習活動の工夫を行い、児童のつまずきを把握し、個に応じた指導を充実させることを通して、児童にできた喜びや達成感を味わわせることで、対象児童の学習意欲や学力が向上するであろう。
〇複数教員で情報交換を行い、児童の実態把握と共有化、課題のある児童の実態に即した指導や教材の開発を行うことにより、児童の学習に対する意欲が向上し、学年全体の学力が向上するであろう。
〇埼玉県学力・学習状況調査の結果から、学校全体の学習状況の傾向を分析、共有し、実態を踏まえて指導展開の工夫を行うことで、学校全体の学力が向上するであろう。

事業実施報告

【通年】　少人数指導
【通年】　習熟度別指導
【通年】　ぐんぐんタイム
9月25日　県学調分析
　　学力向上研修
10月17日　研究授業
11月28日　スクラム訪問

仮説をもとにした取組内容

【取組①】
単元に応じた学習形態や学習活動の工夫を行うことで、児童が考えたり、表現したりしようとする意欲を高める。
・少人数指導
　児童のつまずきを把握し、きめ細かい指導を行う。
・TT指導
　教師の役割分担を明確にした指導を行う。
・習熟度別指導
　プレテストの結果を参考にしながら、習熟度別に指導を行う。

【取組②】
課題のある児童に即した指導や教材の開発を行うことで、児童が自信をもち学習に対する意欲を向上させる。
・チャレンジプリントをスモールステップで実施する。
・授業中にヒントカードを必要に応じて提示する。
・「学習に用いる言葉」「言葉の宝箱」など既習事項を掲示する。
・単元に応じた「〇〇コーナー」に本や資料を設置する。
・専科指導教員を中心に、児童を実態を把握し、学年で共通した教材や指導方法を開発する。

【取組③】
全国学力・学習状況調査や埼玉県学力・学習状況調査の結果を分析し、実態を踏まえ指導を工夫し、教科に関する調査のレベルを高めるとともに非認知能力も高める。
・教育事務所学力向上推進担当指導主事を招いて、埼玉県学力・学習状況調査の帳票40を使って分析方法と児童支援の在り方を研修する。
・児童を伸ばした担当者の学年学級経営、授業運営を取り入れながら、学年・学級経営と授業改善に取り組む。

【取組④】
校内研修を通して、児童に学ぶ意欲を喚起させ、自らの考えを深めさせる方策の研究実践を行い、児童の「もっと」を引き出す。
・学習課題を自分で発見し、学習計画を立てられるようにする。
・児童が自ら進んで学習を進められるようにする。
・児童が積極的に取り組めるよう、魅力的なゴールを設定する。
・考えを友達と交流する時間を設定する。
・考えをまとめられるよう思考ツールを活用し、ICTを有効活用してまとめられるようにする。

令和4・5年度「『未来を生き抜く人財育成』学力保障スクラム事業」の取組　B小学校

成果

【成果①】

学習形態を工夫することで教師の目が届くようになったり、小グループを編成することで児童同士が意見交流をしやすくなったりして、自信をもって表現できる児童が増えた。

学力の同質グループ、異質グループを使い分けることで、児童が教えあうことが活発になった。

さらに、ゲストティーチャーを招聘した授業も行い、普段とは違った指導方法に触れ、指導の関心意欲が高まった。

【成果②】

専科指導教員を中心として学力に課題のある児童に対する教材の作成や補習を行った。一斉での指導だけでは理解が不十分なので、個別の支援を業間休み等少しの時間を見つけ出し積み重ねることで、個別の声掛けを嫌がらず、自ら支援を求める児童が多くなった。

日本語の理解が難しい外国籍の児童に対して、個別授業を行い、学力の向上を実感させることで、意欲が高まった。

【成果④】

児童アンケートにおいて、児童の肯定的な回答が多かった。

・授業がわかりやすい・・・・・92%
・授業は新しいことがわかって楽しい・・・・・82%
・授業中しっかり話を聞き、進んで考えようとしている・・・・・86%

異学年交流をすることで、高学年として学びの成果を発揮する場を設定することができた。課題のある児童も下級生に教えるという活動を通して自信をもてるようになった。

【成果③】

令和5年度、令和6年度の埼玉県学力・学習状況調査では学力を伸ばした児童の割合が県よりも高くなった。

国語 令和5年度　5年生 令和6年度　6年生	学力を伸ばした児童生徒の割合(%)		学力が伸びなかった児童生徒の割合(%)	
	令和５年度	令和６年度	令和５年度	令和６年度
埼玉県	80.2%	46.8%	19.8%	53.2%
○○教育委員会	79.7%	57.5%	20.3%	42.5%
B　小学校	85.4%	63.4%	14.6%	36.6%

算数 令和5年度　5年生 令和6年度　6年生	学力を伸ばした児童生徒の割合(%)		学力が伸びなかった児童生徒の割合(%)	
	令和５年度	令和６年度	令和５年度	令和６年度
埼玉県	67.0%	54.8%	33.0%	45.2%
○○教育委員会	59.6%	65.7%	40.4%	34.3%
B　小学校	68.3%	61.0%	31.7%	39.0%

国語 令和6年度　5年生	学力を伸ばした児童生徒の割合(%)	学力が伸びなかった児童生徒の割合(%)
	令和６年度	令和６年度
埼玉県	67.0%	33.0%
○○教育委員会	75.5%	24.5%
B　小学校	80.0%	20.0%

算数 令和6年度　5年生	学力を伸ばした児童生徒の割合(%)	学力が伸びなかった児童生徒の割合(%)
	令和６年度	令和６年度
埼玉県	56.1%	43.9%
○○教育委員会	62.5%	37.5%
B　小学校	64.4%	35.6%

課題及び今後に向けて

○個に寄り添った指導を行うことで対象児童の学力や学習意欲が高まったので、次年度以降も継続して行う。

○専科を中心に授業を組み立てることで、学年の足並みをそろえることができ、クラスの垣根を取り払い課題のある児童への対応ができたが、次年度以降は、教科担任制を行ったり、学年で同じ時間に教科を揃えて少人数指導を行ったり、人員配置を工夫して行う必要がある。

少人数指導だから考えを発表できる児童もいた。

学年合同で国語の授業を行い、多く児童と交流させることで考えが深まった。